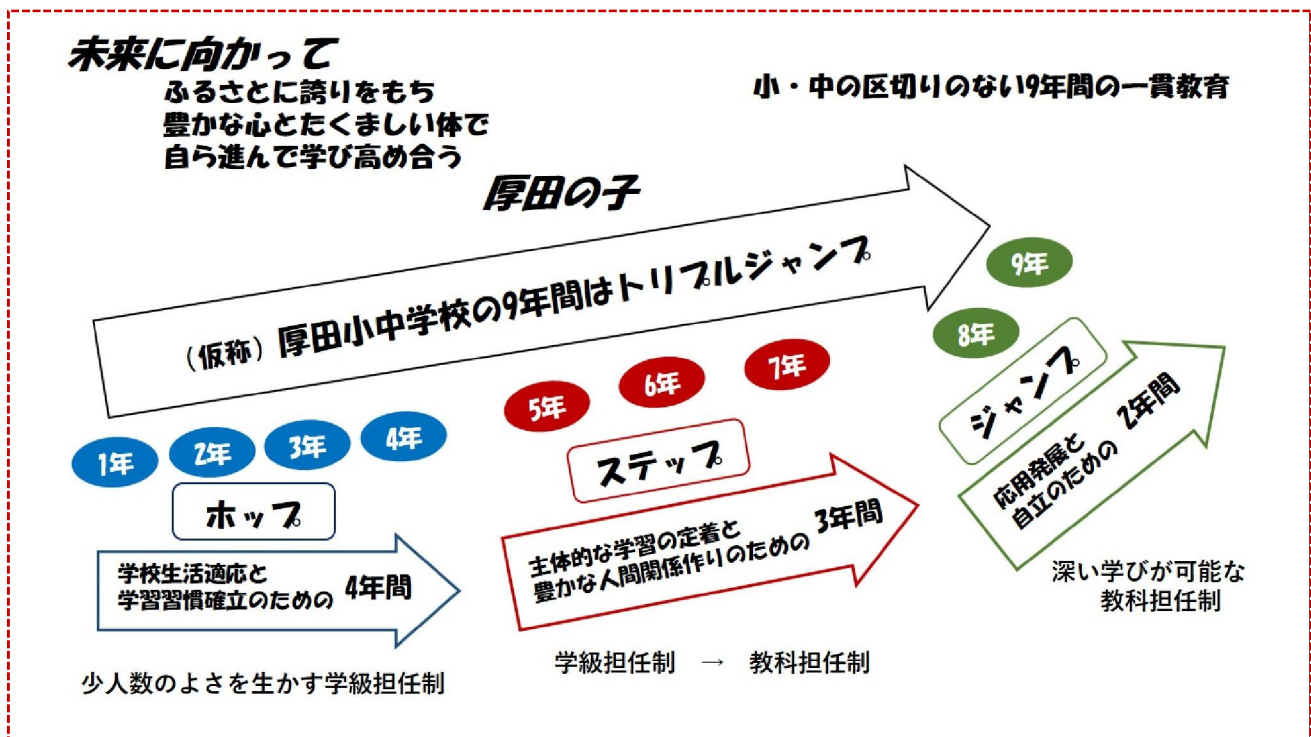


(仮称) 厚田小中学校の9年間はトリプルジャンプ
 ～ 「ホップ・ステップ・ジャンプ」で可能になること ～

厚田区5校の学校長と石狩市教委の協議会



1 はじめに

(仮称) 厚田小中学校は、新しい学校種である義務教育学校として、施設一体型の小中一貫教育を具現化できる校舎を新築して、2020年(平成32年)に開校します。

「未来に向かって、ふるさに誇りをもち、豊かな心とたくましい体で、自ら進んで学び高め合う、厚田の子」を育てるために、15歳の子ども像を共有して、9年間の一貫教育を進めます。

2 厚田区の学校を統合し、義務教育学校として開校する意味

- ・厚田区の各学校は少人数で、統合後も少人数のメリットを生かしたきめ細かな教育が可能です。
- ・統合後も複式学級が残るので、複式指導の困難な面を緩和することが、重要な教育課題です。
- ・平成28年4月から、9年間の教育を一貫して行う義務教育学校の設置が可能になりました。
- ・厚田区の教育のメリットを生かすとともに教育課題を緩和するために、統合新設校を義務教育学校とすることになりました。

3 (仮) 厚田小中の9年間は「ホップ・ステップ・ジャンプ」

- ・9年間を見通したカリキュラムを編成するために必要となる「学年段階の柔軟な区切り」を「学年ブロック」といいます。
- ・(仮) 厚田小中で設定する「ホップ・ステップ・ジャンプ」の3ブロック制で、どのような教育をめざすかを説明します。

4 ホップ (1・2・3・4年) = 学校生活適応と学習習慣確立のための4年間

- ・現在の厚田区の学校では、少人数のメリットを生かしたきめ細かな指導が、学習習慣の定着、確立に成果をあげています。
- ・複式の学習形態では、先生が他の学年を指導している間、自分たちで学習を進める必要があるため、子どもたちには、課題と役割を自覚し、主体的に学ぶ姿勢が定着しています。このことは高い学力という成果につながっています。
- ・学校生活に慣れながら学習習慣を身に付ける段階では、子どもの不安を取り除き、安定した生活と学習を可能にするため、一人の先生による一貫した指導という学級担任制が効果的に機能します。

5 ステップ (5・6・7年) = 主体的な学習の定着と豊かな人間関係づくりのための3年間

義務教育学校の最重要段階 (現行における小中接続の“鍵”となるブロック) : 対策は教科担任制の導入

- ・ステップのブロックから教科担任制を取り入れることで、一人ひとりの学習のつまづきを未然に防ぎ、専門の先生の指導による興味・関心の高まりをめざします。
- ・教科担任制を取り入れることで、一人の先生が一つの学年を指導し、1時間途切れることなく先生と子どもたちによる指導と学習が可能となるため、この段階から急増する「理論的・抽象的な理解が必要な学習内容」を、確実に定着させることが可能となります。
- ・厚田では、少人数の集団で専門的な指導を受けることが可能となるため、大きな効果が期待できます。
- ・ステップのブロックは、より良い人間関係を構築し、自尊感情や自己有用感を培うことが求められる時期です。教科担任制によって多様な人間関係のひろがり期待できます。
- ・7年生が、学習規律や学ぶ姿勢などで見本となり、リーダーシップを発揮することによって、5・6年生の学習や生活の向上が期待できます。

小中一貫教育で、5年・6年・7年が、最も重要なブロックとされる背景

【小5の壁】

- ・6-3制が導入された昭和20年代前半と比較すると、例えば、平成25年の児童生徒の身長伸びや体重の伸びが最も大きい時期は、当時よりも2年程度早まっている。
- ・「学校の楽しさ」、「教科や活動の時間の好き嫌い」について、小学校4年生から5年生に上がると肯定的回答をする児童の割合が下がる傾向がある。
- ・経験的な理解で対応できる学習内容から、理論的・抽象的な理解が必要な学習内容への橋渡しが必ずしも円滑に行われておらず、学習上のつまづきが顕在化し、その後の中学校段階での学習に大きな支障を来している。
- ・このような状況を踏まえ、おおむね小学校4～5年生頃に児童生徒にとっての発達上の段差（「小5の壁」と言われる場合がある。）が存在しているのではないかとの指摘がなされている。
- ・かつては、1-6年はある程度均一な特性を持つ集団であったが、現在は発達の早期化に起因して、小学校の1-4年と5-6年は、大きな差異のある集団となった。

【中一ギャップ】

- ・不登校児童生徒数、いじめの認知件数、暴力行為の加害児童生徒数が、小学校6年生から中学校1年生になったときに生徒指導上の問題に大幅に増える。
- ・学習指導面においても、「授業の理解度」「学校の楽しさ」「教科や活動の時間の好き嫌い」について、中学生になると肯定的回答をする生徒の割合が大きく下がる傾向にあることや、「上手な勉強の仕方が分からない」「やる気がおきない」「勉強が計画通り進まない」と回答する児童生徒数が大幅に増え、「毎日コツコツ勉強する」「勉強に自信がある」と解答する児童生徒が大きく減少する傾向が明らかとなっている。
- ・小学校6年生と中学校1年生の間の接続を円滑にする取組から始めつつも、それだけに終わることなく、義務教育9年間全体での取組を充実させることが重要である。
 - * 「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引き」（平成28年文科省）より引用
- ・学年段階の区切りを変更する場合、4-3-2や5-4など様々なものがありますが、いずれも共通するのは小学校段階と中学校段階にまたがる区切りを設け、学校段階間の円滑な移行を図っているということです。
 - * 「北海道「小中一貫教育推進事業」成果のまとめ・北海道における小中一貫教育について（平成30年2月北海道教育委員会）より引用

6 ジャンプ（8・9年）＝応用・発展と自立のための2年間

- ・「未来に向かって、ふるさとに誇りをもち、豊かな心とたくましい体で、自ら進んで学び高め合う、厚田の子」という9年間を通した教育目標（案）のゴールとなる大切な学年ブロックが、「ジャンプ：8-9年」です。
- ・応用・発展の力を育てるためには、課題の解決に必要な思考力・判断力・表現力を育成する学習が大切です。また、自立のためには、進路を見据え、多様な人間関係を築くことによって、自分らしい生き方を考え、確かな自己実現を図る活動を経験する必要があります。
- ・義務教育9年間の仕上げの期間を9年生単独とするのは短かすぎます。8年生と9年生との2学年で「ジャンプ」のブロックを作ることで、9年生は最上級学年としてリーダーとしての自覚を持ち、8年生は9年生の姿を見て次年度に最高・最終学年を迎える上での目標や自覚を持つことが可能になります。

7 学年ブロックを生かした異学年交流の充実

- ・（仮称）厚田小中学校は各学年が少人数であるため、学年や複式学級の枠を越えて、ブロックで活動する場面が多くなります。3つの学年ブロックを設け、ブロック間の学年差を小さくすることで、ブロック内の異学年交流を充実させることが期待できます。
- ・例えば、これまで全校集会として1年から6年が一堂に会する場合、学年間の差が大きいため企画や運営に困難を感じる状況が見られました。1年から4年というブロックで発表を行うと、上の学年の児童にとって大きな励みになり、下の学年の児童にとっては、次の段階の目標になります。5～7年、8～9年のブロックにおいても同様に、異学年交流の充実という効果が期待できます。
- ・ブロック間の交流についても実践事例と効果が先進校から報告されています。「ホップ：1～4年ブロック」と「ジャンプ：8～9年ブロック」を組合せた縦割り清掃などブロックの組合せを工夫した取組みによって、幅広い人間関係が生まれ、上級生が下級生に対して優しく接し、リーダーとしての自覚を高めたり、下級生が上級生に対してあこがれの気持ちをもったりする教育的な効果が期待できます。

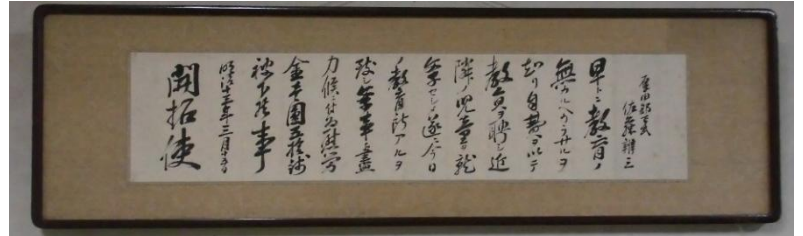
8 厚田モデルのコミュニティ・スクールを生かす「4・3・2」の学年ブロック

- ・「厚田ならではの教育、厚田ならではの学校づくり」という言葉が様々な場面で語られてきたように、厚田における地域と教育の関係は、きわめて大きな特色となっています。
- ・（仮称）厚田小中学校の開校と同時に、学校運営協議会による「厚田モデルのコミュニティ・スクール」がスタートし、地域との連携、ふるさと学習、地域課題に対応した取組が行われます。
- ・現在、厚田、望来、聚富の3地区において、それぞれ地域住民による非常に多様で充実した学校の支援が行われています。統合後は、農業体験の支援を例にしても、支援の重複を調整する必要がありますが、3地区で行われている支援を、4・3・2制の3ブロックに対応するよう調整していた

だくことによって、今まで同様の対応が可能となり、また、発達段階に応じた学年差の少ないブロックを支援していただくことで、地域の教育力がより強力に発揮されることが期待できます。

9 まとめ

写真は、厚田小学校の校長室に掲げられている創世記の厚田の教育に対して開拓使から贈られた感謝状です。



北海道で最も歴史のある学校の一つである厚田の学校を支えてきた約 140 年にわたる厚田の教育の歴史は、住民の熱意と貢献が学校とともに創りあげた誇りある歴史です。

しかし今日、少子高齢化に起因する教育課題が、厚田区の教育に影を落とし、学校の統合が決定されました。

厚田区の教育の将来に向けたより良いあり方を検討していた時期に、国では、小中一貫教育の成果を踏まえて新しい学校種である義務教育学校を創設することや、コミュニティ・スクールの充実に向けて、法改正が行われました。

国がめざす改革の方向は、9年間を見通して地域が学校と一体となって子どもを育ててきた厚田の教育の特色と同一でした。

このことを尊重して、石狩市教育委員会は、新設する（仮称）厚田小中学校を新しい学校種である義務教育学校とし、同時に厚田型コミュニティ・スクールをスタートさせることを決定しました。

現在、設立準備委員会や教育課程部会において、これまでの経過と趣旨が踏まえられた具体的検討がなされ、着々と開校に向けた準備が進められています。

設立準備委員会の委員各位、関係校の学校関係者の皆様におかれては、これまで述べた内容を踏まえ、5校（4名）の校長によって提案された「ホップ・ステップ・ジャンプという学年ブロックを生かした、9年間の一貫教育・トリプルジャンプ」という基本構想についてご承認をいただき、2年後の開校に向け、さらに具体的な検討を進めていただくようお願いいたします。

【資料編】 (仮称) 厚田小中学校に関する Q&A

Q 制服はどのようなになるのですか。

A 7年生から9年生が制服を着用します。

(仮称) 厚田小中学校は9年間をまとまりとする義務教育学校として開設しますが、周囲の大多数の学校は6年間の小学校と3年間の中学校です。

例えば、中文連の音楽発表会をはじめ、市内や管内単位による中学校の行事がありますが、それに参加するのは7年生から9年生になります。対外的な行事の際にはこれまでどおり、制服を着用することが原則になりますので、7年生から9年生が制服を着用することになります。

Q 小学生は部活動に参加できますか。

A **前期課程（現行の小学1～6年）**と**後期課程（現行の中学1～3年）**の連続性を大切にしますが、対外的な活動には参加できません。（その理由としては、前述の「制服」についての回答と重複するところがあります。）

(仮称) 厚田小中学校は義務教育学校として開設しますが、周囲の大多数の学校は6年間の小学校と3年間の中学校です。

体育系の部活動団体である中体連と、文科系の部活動団体である中文連は、中学生を対象とした団体であるので、義務教育学校では7年生以上が参加対象になり、6年生以下は参加できません。

一方、小中一貫教育に取り組む学校では、校内の活動としては次のような事例がありますので、今後、教育課程部会で具体的なあり方を検討することになります。

- ① 後期課程での部活動の見学の機会を、年間複数回設定する
- ② 週数回、後期課程での部活動に参加することを認める
- ③ 前期課程の高学年の児童が、後期課程での部活動に本格的に参加することを認める
- ④ 小学校において発達の段階に即した独自の部活動を行い、中学校への円滑な接続を図る

Q 卒業式などの式はどうなるのですか。

A 委員の皆様のご意見を参考に、教育課程部会でこれから検討していきます。

義務教育学校は9年間が一つのまとまりの学校なので、制度上は、卒業式は9年の義務教育を終了する時点の1回になります。

しかし、これでは児童生徒の励みにならないという指摘は当然ですので、いろいろな形で成長や段階の節目としての修了を祝う式が行われています。

4・3・2のブロック制を導入している中標津町立計根別学園では、前期課程の4年修了時に「2分の1成人式」、後期課程の7年修了時に「立志式」を行っています。

また、義務教育学校では、現行の学校設置基準に基づく従来の小学校・中学校に準じて、前期課程と後期課程に分けていますので、例えば転校する場合など、周囲の学校との関係を考えて、「前期課程修了式」を実施することも考えられます。

具体的なことについては、今後、教育課程部会で検討します。

Q 教員が義務教育学校に勤務する際は、小・中学校の両方の免許状が必要ですか。また、乗り入れ授業を行う際に、所有している免許状により指導に制限はありますか。

A 義務教育学校の教員については、小学校及び中学校の教諭の免許状の併有を原則としつつ、当分の間は、小学校又は中学校の教諭の免許状を有する者は、それぞれ義務教育学校の前期課程又は後期課程の主幹教諭、指導教諭、教諭又は講師となることができるものとしています。(免許状による指導の制限・概要)

例えば、中学校の理科の免許状のみをもっている場合は、義務教育学校の前期課程において、次の指導が可能になります。

- ① 理科の専科指導に当たること
- ② 総合的な学習の時間で理科に関わる指導に当たること
- ③ 道徳、特別活動を担当すること
- ④ ティーム・ティーチングにおけるT2として、所有免許状以外の教科の指導に携わること

小学校の免許状のみをもっている場合は、義務教育学校の後期課程において、基本的に次の指導が可能になります。

- ① 全教科の習熟度別指導の1グループを担当すること
- ② 全教科のティーム・ティーチングにおけるT2として指導に携わること

このような制約はありますが、義務教育学校の教員として、児童生徒の9年間に責任を持った指導のあり方を工夫していくことが求められます。

Q 幼保小中の連携は、どのように行われるのですか。

A 現在の教育課程部会は、小学校と中学校の教員によって構成されていますが、今後、厚田保育園の職員も参加して、連携の方法を検討する必要があります。

平成 30 年度に道内で 4 番目の義務教育学校として開校した白糠町立庶路学園は、幼保小中が一つの施設で学び生活する学園です。先行事例として情報を収集ながら、厚田における幼保小中のあり方を考えていきたいと思っています。